

特別報告

ドイツ語圏における死生観研究における予備調査Ⅱ

浅見 洋¹

1. 用務地 (旅行期間)

ドイツ連邦共和国(平成21年10月5日～15日)

2. 用務先

ライプツヒ大学東アジア研究所 (Ostasianisches Institut, Universität Leipzig)

カッセル・埋葬文化博物館 (Museum für Sepulkralkultur Kassel)

ハイデルベルク大学神学部実践神学ゼミナール (Praktisch-Theologisches Seminar, Universität Heidelberg)

3. 出張目的

今回の研究出張は昨年度の継続調査であり、死生観とケアの研究、特に日独における死生観とケアの比較文化的な研究の予備調査である。調査・視察の具体的対象は①悲哀に関する哲学的理解、②ドイツにおける埋葬文化、③ドイツ語圏における医療的な魂のケア (Seelsorge) の現状、の3

点であり、出張旅費は科学研究費補助金「現代日本における高齢者の死生観とケア・ニーズに関する研究」基盤研究 (B)、課題番号 16320012 から支出した。

4. 研究旅行の内容

4.1 悲哀に関する哲学的理解

最初に訪ねたライプツヒ大学東アジア研究所教授の小林敏明氏は哲学および精神病理学が専門である。『精神病理からみる現代思想』『西田幾多郎—他性の文体』『西田幾多郎の憂鬱』『廣松渉—近代の超克』『憂鬱な国／憂鬱な暴力』など、現代日本を精神病理学の立場から読み解くと同時に、ユニークな西田哲学の研究書を公刊しておられる。『Melancholie und Zeit (メランコリーと時間)』、『西田幾多郎の憂鬱』ではメランコリーをキーワードとして西田の哲学と人物像を卓抜な筆致で描いておられる。私自身は『二人称の死—西田・大拙・西谷の思想をめぐって—』で悲哀を

表1 旅行日程

月 日	行 程	宿泊地
10月5日 (月)	移動日：金沢→関西空港	関西空港
10月6日 (火)	移動日：関西空港→Frankfurt	Frankfurt
10月7日 (水)	Frankfurt → Leipzig	Leipzig
10月8日 (木)	Ostasianisches Institut, Universität Leipzig	Leipzig
10月9日 (金)	Leipzig → Kassel Museum für Sepulkralkultur Kassel	Kassel
10月10日 (土)	Kassel → Frankfurt	Frankfurt
10月11日 (日)	Frankfurt → Heidelberg	Heidelberg
10月12日 (月)	Praktisch-Theologisches Seminar der Universität Heidelberg	Heidelberg
10月13日 (火)	Praktisch-Theologisches Seminar der Universität Heidelberg Heidelberg → Frankfurt	Frankfurt
10月14日 (水)	Frankfurt → 関西空港 (10/15 着)	機中
10月15日 (水)	移動日：関空→金沢	

¹ 石川県立看護大学

テーマとして以来、グリーフ（悲哀）ケアに関心を持ち続けてきた。Sigmund Freud は「Trauer und Melancholie（悲哀とメランコリー）」（1917）で「悲哀（Trauer）はきまって愛する者を失ったための反応であるか、あるいは祖国、自由、理想などのような、愛する者のかわりになった抽象物の喪失にたいする反応である。これと同じ影響のもとにあって、病的な素質の疑われる人たちでは、悲哀のかわりにメランコリー（Melancholie）が現われる」（S. Freud : Werke aus den Jahren 1913-1917, S.428-9）と記しており、この小論でのフロイトの悲哀理解がグリーフケアを考える際の原点といえる。

今回のライプツヒ訪問の最大の目的は、小林教授に「メランコリーと悲哀の違いはどこにあるか」という問いを投げかけることであった。その答え、「キルケゴールの不安（Angust）と恐怖（Furcht）のようなものですよ」をはじめ、多くの示唆に富んだ対話をもつことができた。

その他、大学の東アジア研究所の図書館、旧東ドイツにおける民主化運動の拠点となったニコライ教会、J. S. バッハが音楽監督をつとめた聖トマス教会、西田『善の研究』序文にその名が登場するローゼンタールの森などを見学した。



図1 聖トマス教会のバッハ像の前で

4. 2 ドイツにおける埋葬文化と死生観

Museum für Sepulkralkultur Kassel（カッセル・埋葬文化博物館）は1992年に開設された比較的新しい博物館で、ヘッセン州を中心にドイツ全土の過去から現在までの幅広い埋葬文化が紹介されている。1, 400平方メートルのスペースに、お棺、霊柩車、喪服、装飾品、墓石、記念碑など、臨終、死、追悼などに関連した事物が展示されている。また、附設の図書館には15世紀から現代までの、約16,500点のグラフィックのコレクション、モノグラフィー、パンフレット、印刷物、埋葬に関する新聞記事などが収められている。

埋葬は人々の死生観、悲哀、追憶などが表出されている文化的な営みであり、死別した人々の悲哀を癒す儀礼でもある。ドイツの埋葬儀礼や死生観にはキリスト教的背景があることは言うまでもないが、古代ゲルマン的な俗信などの影響も垣間見えた。

4. 3 ドイツ語圏における医療的な魂のケア（Seelsorge）の現状

ハイデルベルク大学神学部の実践神学ゼミナール（Praktische Theologie Seminar）の図書館で医療的なSeelsorge、特に悲哀に関するケア（Sorge）の書籍を調査した。

Spiritual careの思想的源泉がキリスト教のSeelsorgeであるという指摘は、平山正実、浜渦辰二、坂井祐円など、日本国内の精神医学や生命倫理の文献でもしばしば見出すことができる。しかし、W. Kippesのものを除くと、医療と関わるSeelsorgeの内容に踏み込んだ日本語文献は希である。それに比して、ドイツの大学神学部や神学校の実践神学においてSeelsorgeの学びは基本的であり、神学部の卒業生には医療スタッフとして病院で「魂のケア」にたずさわっている者も少なくない。今回ハイデルベルクを訪ねたのが丁度大学の学期始めに重なったため、大学の本屋で神学生たちが使用しているSeelsorgeの教科書を買うことができた。また、魂をケアする人（Seelsorger）が書いた比較的読みやすい書籍を邦訳したいという願いも持つこともできた。

（受理：2010年1月25日）

**Preliminary Research concerning Views on Life and Death
in the Region where German is Spoken (II)**

Hiroshi ASAMI